

川

新美南吉

青空文庫

四人が川のふちまできたとき、いままでだまってついてくるようなふうだった薬屋くすりやの子の音次郎君おとしろうが、ポケットから大きなかきをひとつとり出して、こういった。

「川の中にいちばん長くはいつていたものに、これやるよ」

それを聞いた三人は、べつだんおどろかなかつた。だまりんぼの薬屋の音次郎君は、きみような少年で、ときどきくちをきると、そのときみなで話しあっていることとはまるでべつの、へんてこなことをいうのがくせだったからである。三人は、なによりも、その賞品に注意をむけた。

つややかな皮をうすくむくと、すぐ水分の多いきび色の果肉があらわれてきそうな、形のよいかきである。みなはそれを、百匁ひやくめがきといっている。このへんでとれるかきのうちでは、いちばん大きい種類である。音次郎君の家のひろい屋敷やしきには、かきや、みかんや、ざくろなど、子どものほしがるくだもの木がたくさんある。音次郎君がきみよ
うな少年であるにもかかわらず、友だちが音次郎君のところへ遊びに行くのは、くだもの

がもらえるからだ。

ところで、賞品のほうはまず申しぶんなしとして、川のほうはどうであろう。秋もすえにちかいことだから、水は流れてはいない。けれどこの川は、はばがせまいかわりに、赤土の川床かわどこが深くえぐられていて、つめたい色にすんだ水が、かなり深くたたえられている。夏、水あびによくきたから、だいたい深さの見当はつくのである。へそのへんまでくるだろう。

三人はちよつと顔を見あわせて、どうしようと目で相談したが、すぐ、やつたろかと、やはり目で、話をまとめた。するともう、森医院の徳一とくいち君が、ズボンのバンドをゆるめはじめた。なにか、しがいのあるいたずらをするときのように、顔がかがやいている。ほらふきの兵太郎へいたろう君は着物だったので、まずかばんをはずして、しりまくりし、パンツをぬいだ。久助きゆうすけ君もおくれてはならぬと、ズボンをぬいで、緑と黄のまじった草の上ですてた。

ぬいでしまうと、へんに下がるくなつた。風が素足すあしにひえびえと感じられる。

徳一君を先頭に、川つぶちの草にすがりながら、川の中にすべりおりた。ひと足入れると、もう、ひざっこぶしの上まで、水がくるのである。

「つめたいなあ」

足から身内みうちにあがってくる冷気が、しぜんに三人にいわせるのであった。

かきがほしきだけではなかった。いまじぶん、おしりをまくって水にはいることが、おもしろいのだった。そこで三人は、上で見ている音次郎君にいわれるまでもなく、まん中あたりまではいっていった。案のとおりだった。水はひたひたとはいあがってきて、久助君のおへその一センチばかり下でとまった。

三人は、むきあつて立つて、じぶんのへそをあらためてながめたり、ひとのへそを観察したり、じぶんたちのぎまのおかしさにクスクスわらったりした。しかし、ものをいうと、歯がカチカチ鳴って、みように力が背せなか中に集まるような気がした。動くにつめたさがいつそうひどく感じられた。

しばらくみなだまっていた。どこかで、日ぐれの牛がさびしげに鳴いた。それをしおに、徳一君がげんしゆくな表情になつて、そろりそろりと岸の方へ動きだした。まだぬれていないところをなるべくぬらさぬように、ゆっくりいくのである。久助君と兵太郎君は顔を見あわせたが、もうわらわなかつた。

久助君はふたりきりになると、このゆうぎはひどくばかげていると感じられたので、ま

だがまんすればできたのだが、勝ちを兵太郎君にゆずることにした。徳一君がしたように、そろりそろり岸の方へ歩みよって、草にすがって上にあがった。

草をふんで立つと、ひえのために、足のうらがしびれているのが、よくわかる。すぐ手ぬぐいで足から腰をふいて、パンツとズボンをはいた。からだがふるえているから、ズボンをはくときよろけていって、やはりズボンをはいている徳一君にぶつかった。

まだ兵太郎君は、川の中にはいつている。もう勝ちをはかれにきまったのだから、なにも、やせがまんしているわけではないのだが、とくいなところをひとに見せたいのだろう。こういう点が、ほらふきの兵太郎君のばかなところであると、久助君は思っただけで見ていた。兵太郎君は平気をよそおって、南の方をむいて立っていた。

負けたふたりはからかいたくなつて、上から、

「がんばれツ、がんばれツ、兵タン」

と、声援せいえんした。音次郎君も、どういうつもりかそれに声をあわせた。

「かき、たべてしまおかよ」

と徳一君が、いたずらっぽい目を光らせながらささやいたとき、久助君は、そいつは兵太郎君がかわいそうだという気持ちと、そいつはおもしろいという気持ちがいっしょに動い

た。兵太郎君をおこらせるのは、とてもおもしろいということ、これまでの経験で、みなよく知っているのである。

川の中の兵太郎君が、聞きつけて、

「こすいぞツ」

と、さげんだ。

そもうはじまった。はやくしろ、はやくしろ。

徳一君がすばやく、音次郎君の手からかきをうばいにとって、ひと口かぶりついた。案のじょう、きび色の美しい果肉があらわれた。それを徳一君からうけとると久助君は、徳一君のかじった反対側のほうを、大きくかじった。そして、あとをもとの音次郎君にわたした。すると、音次郎君もひと口かじったので、かれもまた、このいたずらに参加していることがわかった。

兵太郎君は、いまさらわめいても追っつかぬことを見てとった。かれは先のふたりのように、ゆつくり岸に近づいた。それから、ふちの草につかまった。けれど、つかまったままじつとしている。なにか思案しあんしているようすである。

こちらの三人は、顔を見あわせた。三人の顔から、ちやめ気が、しばらくためらって、

そしてぬけていった。しんとなった。

青ざめた顔を兵太郎君がしかめた。そして腹がいたいときのように、腰をおった。

「どうした、兵タン」

と徳一君が、おどおどしてきいた。

「あがつてこいよ」

と、久助君もいっしょにいった。

それでも兵太郎君は、かた手で草につかまっただまま、動こうとはしなかった。ほおげたの下の、ひとところ、チョークでもなすりつけたように白いのが、久助君の目にいたいたしくうつった。これはたいへんだと思つた。

三人はよつていって、兵太郎君のつめたい手をにぎつて上にひっぱりあげると、兵太郎君は死にかかりの人のように力なく、三人のなすがままになった。あがつてきてもかれは、ベソをかいた顔つきで、ぼけんとつつ立っているの、三人はしまつをしてやらねばならなかつた。徳一君と久助君は、めいめいの手ぬぐいを提^{ていきよう}供して、兵太郎君のかた足ずつをふいた。音次郎君は、草の上からパンツをひろつてきた。兵太郎君は、なにからななまで、みな、ひとにさせた。ぼうしまでかぶせてもらった。

ところで、兵太郎君は、すっかり身じたくができたのに、歩きだそうとしなかった。ときどきいたみがおそうかのように、顔をしかめて腹のところからからだをおった。

あとの三人は、こまったなア、というように顔を見あわせた。しかし、ほんとうに兵太郎君のからだに故障ができたかどうか、三人は半信半疑だった。

というのは、兵太郎君はいぜんから、死んだふりや、腹のいたむまねが、ひじょうにうまかつたからである。フットボールが飛んできて、兵太郎君の頭にあたりでもすると、かれはふらふらとよろめいて、地べたの上のところきらわずぱったりたおれ、あたりどころが悪くて、自分はおだぶつしてしまったのだというようすをして見せるのであった。そのまねは、真にせまっていた。久助君はまだ、人間がフットボールにあたって死ぬところを見たことはないが、もしそういうことがあるならば、きつと兵太郎君がするとおりの所作しよさくをして死ぬだろうと思っていた。たびたび兵太郎君のまねにだまされたものでも、いったん兵太郎君が、死んだまねをしてたおれると、こんどこそほんとうに死んでしまったのではないかと思うのだった。そして、みながそろそろ心配しかけるころを見はからって、死んでいた兵太郎君は、ひやつというようなさけび声をあげて、生き返ってくるのが常だったのである。

だからきょうも、あてではないかと、三人は思った。賞品のかきをせしめられたらはいせに、きょうのしぼいはいつもより手がこんでいて、長いのではあるまいか。

しかし、じつさい顔の色がいつもより青い。それに、フットボールがあたつたくらいのこととはちがつて、かなり長く、下腹部かぶくぶをひやしたのである。病気になる可能性は、ほんとうにあるのである。

それなら、こりやじぶんたちも同じように腹をひやしたのだから、同じようなことになるのではないかと、久助君は、こんどはじぶんの腹が心配になりだした。そう思うと、なんだかへその下の方がしくしくするみたいである。

「よし、おぶされッ」

と、徳一君は、しやがんで背中せなかを兵太郎君の方にむけた。兵太郎君は力なくおぶさった。

音次郎君が徳一君のランドセルを持ち、久助君は、兵太郎君の足からぬげて落ちたきたないげたを持った。どさくさまぎれで地に落ちて砂にまみれた食いかけの百匁ひやくめがきを、久助君はポーンと川の中へけとばした。そして三人は出発した。

つぎの朝久助君は、山羊やぎにえさをやるため、小屋の前へ行って、ぬれた草を手でつかんだとき、きのうの川のできごとを思い出した。と同時に、兵太郎君はどうなつたろうという心配が、重く心にのしかかつてきた。

まもなくまた忘れてしまった。だが心配の重さだけは忘れていないまも心にのこっていて、なんとなく不愉快ふゆかいであつた。

七時半になると、いつものように家を出た。学校のうらてへむかつて一直線に走っている細い道に出たとき、五十メートルほど前を、薬屋の音次郎君が、なにかつまらないことでも考えているように、拍手をしては右手を外の方へうっちゃりながら歩いていくのを見た。

久助君は、ふたりで心配をわかちあい、ひとりで苦しんでいることからまぬがれようと思つて、走つていった。けれど音次郎君は、きのうのことなどまるで気にもかけていないようすであつた。じぶんはとりこし苦勞をしていたのかと久助君は思つて、ほつとした。なんでもなかつたんだ。

音次郎君は久助君といつしよになつても、あいかわらず拍手をつづけながら、じぶんひ

とりのつまらない考えを追って歩いていた。まもなくうしろから、ゴツゴツとランドセルの音をさせて、だれか走ってきた。森医院の徳一君である。このあいだ新調したばかりのぼうしのひさしを光らせながら、「おはよう」と、元気よく近づいてきた。そして、こうきいた。

「きょう、算術の宿題なかったかね」

徳一君もやはり、きのうのことなんか気にしていないのである。事実、なんでもないのである。この世には、そうかんとんに、できごとはおこらないのだ。

三人は教室にはいった。ほかのものももう、たいていきている。教室の中にも十人ほどいる。そのなかには兵太郎君がいないことを、久助君はひと目でたしかめた。

兵太郎君の席は、徳一君のすぐとなりであった。用具がそこにはいつているかと思つてそちらを見たとき、久助君は、徳一君もやはりそういう目つきで見ているのを発見した。のみならず、音次郎君もやはり、兵太郎君の席を見ていた。

みんな、心のおくで、同じ心配をもっているのだと、久助君はわかった。

徳一君が、ちよつと兵太郎君のつくえのふたをあけた。久助君は心臓しんぞうがどきつくのをおぼえた。中には、なにもはいつていなかった。

その日から、兵太郎君は学校へこなくなってしまうたのである。

五日、七日、十日と、日はたつていったが、兵太郎君は学校へすがたを見せなかった。しかしだれひとり、兵太郎君のことをくちにするものがない。久助君は、それがふしぎだった。五年間もともに生活したものが、ふいにぬけていっても、あとのものたちは、なにごともしなかつたように平気でいるのである。だがこれがあたりまえのようにも思われた。

久助君は、徳一君と音次郎君だけはじぶんと同じように、消えてしまった兵太郎君のことで心をいためていることはわかっていた。それなのに、この三人は、ひとことも、兵太郎君についていわないのであった。そればかりでなく、みようにおたがいの目をおそれて、おたがいにさけあうようになった。

さまざまに、久助君は思いまどった。たとえば、先生にいつさいのことをうちあけて、あやまつてしまったらどうだろう。心がかかるくなるのではあるまいか。しかし、あの川のことでもとで、じつさい兵太郎君は病気になったのなら、兵太郎君がそれをだまつているはずはない。おとうさんかおかあさんに、話したにそういあるまい。そうすれば、おとうさん、あるいはおかあさんの口から、先生のところへ情報はとどいているはずである。ひよつとすると、先生はもうなにもかもごぞんじなのもかもしれない。それを、わざと知らん

ふりをしておられるのは、久助君たちが自首して出るのを待つておられるのではあるまいか。そんなふうにして、知らず知らず首をすくめながら、先生の顔をうかがうこともあった。

あるときは、自首したい衝動にひどくかられた。それはちようど国史の時間であつたが、いつもおもしろく聞ける国史の話が、心の中の煩悶はんもんのために、ちぎれちぎれになつて、ちつともおもしろくないので、こんなになさけないめにあうのも、じぶんがひみつをもっているからだ、いつてしまひさえすれば心は解放されるのだ、と思うと、とつじよ立ちあがつて、

「先生、ぼくたち三人で、兵太郎君をだまして、病気にしたのです！」
と、さげびたくなつた。しかし、平常とすこしも変わらないあたりの空気が、なぜかその衝動をおさえさせた。ま昼間、心もたしかなのに、久助君は、じぶんのすぐかたわらから、もうひとりの久助君が、すくつと立ちあがつて、

「先生！」

といいはじめる幻影げんえいを、三ども四ども、はっきり見たのだった。耳がじいんとなつて、両手にあせをにぎつていた。

二カ月、三カ月とすぎた。まだ兵太郎君は、学校へすがたを見せない。そのあいだ、久助君は兵太郎君について、ほとんどなにも聞かなかつた。ただ一ど、こういうことがあつた。ある朝、久助君が教室にはいつてくると、ちようどいきちがい、ふたりの級友がつくえをひとつ、ろうかへさげ出していった。

「だれのだい」

と、なにげなくきくと、ひとりが、

「兵タンのだよ」

とこたえた。それだけであつた。それからかういうことがもう一どあつた。薬屋の音次郎君がある午後、うら門の外で久助君を待つていて、いまから兵タンのところへ薬を持っていくから、いっしょにいこうとさそつた。久助君はびつくりしたが、同意して出かけた。薬は、アスピリンという、よく熱をとる薬だそうである。兵太郎君はかぜをひいたのがもとだから、このアスピリンで熱をとれば、すくなおつてしまふと、音次郎君は、医者のように自信をもつていった。ほんとうにそうだと、知らないくせに久助君も思つた。それにして、それほどよくきく薬なら、なぜもつと早く持つていつてやらなかつたのだろう。やがて、いつもは通らない村はずれの常念寺じょうねんじの前にきた。常念寺の土塀どべいの西南のすみに、

小さな家が土塀によりかかるように、（事実、すこしかたむいている）建っている。それが兵太郎君の家である。ふたりは、土塀にそって歩いていった。兵太郎君の家の前にきた。入口があいていて、中は暗い。人がいるのかいないのか、コトリとも音がしない。日のあたるしきいの上で、ねこが前あしをなめているばかりだ。ふたりの足はとまらなかつた。むしろ、足ははやくなつた。そして、通りすぎてしまい、それきりだったのである。

久助君は、ほかの友だちとわらつたり話したりするのが、きらいになつた。そして、ひとりではんやりしていることが多かつた。それから、ひどく忘れっぽくなつた。なにかしめて忘れてしまうようなことが多かつた。いま手に持っていた本が、ふと気づくと、もう手になかつた。どこにおいたか、いくら頭をしぼつても思い出せないというふうであつた。お使いにいつて、買うものを忘れてしまい、あてずっぽうに買って帰つて、まるでラジオで聞く落語みたいだとわらわれたこともあつた。

もとから久助君は、どうかすると見なれた風景や人びとのすがたが、ひどく殺風景にさつぷうけいあじけなく見え、そういうもののなかにあつて、じぶんのたましいが、ちょうど、いばらの中につつこんだ手のように、いためられるのを感じることがあつたが、このごろはいつそうそれが多く、いつそうひどくなつた。こんなつまらない、いやなところに、なぜ人間

は生まれて、生きなければならぬのかと思つて、ぼんやり庭の外の道をながめていることがあつた。また、つめたい水にわずか五分ばかりはいつただけで、病気にかかり死なねばならぬ（久助君には、兵太郎君が死ぬとしか思えなかつた）人間というものが、いつそうみじめな、つまらないものに思えるのであつた。

三学期のおわりごろ、ついに兵太郎君が死んだということを、久助君は耳にした。べんとうのあと、久助君は教だんのわきで日なたぼっこをしていた。すると、むこうのすみで話しあつていた一団のなかから、

「兵タンが死んだげなぞ」

と、ひとりがいつた。

「ほうけ」

と、ほかのものがいつた。べつだん、おどろくふうも見えなかつた。久助君もおどろかなかつた。久助君の心は、おどろくには、くたびれすぎていたのだ。

「うらのわら小屋で死んだまねをしとつたら、ほんとに死んじやつたげな」

と、はじめのひとりがいつた。ほかのものたちは明るくわらつて、兵太郎君の死んだまねや腹痛はらいたのまねのうまかつたことを、ひとしきり話しあつた。

久助君は、もう聞いていなかった。ああ、とうとうそうなってしまったのかと思った。そつとかた手を、ゆかの上の日なたにはわせてみると、じぶんの手はかさかさして、くたびれていて、悲しげに、みにくく見えた。

三

日ぐれだった。

久助君のからだのなかに、ばくぜんとした悲しみがただよっていた。

昼のなごりの光と、夜の先ぶれのやみとが、地上でうまくとけあわないような、みょうにちぐはぐな感じの、ひとときであった。

久助君のたましいは、長い悲しみの連鎖れんさのつづきを、くたびれはてながら旅人たびびとのようになどどつていた。

六月の日ぐれの、びみょうな、そして豊富な物音が戸外にみちていた。それでいてしずかだった。

久助君は目をひらいて、柱にもたれていた。なにかよいことがあるような気がした。い

やいや、まだ悲しみはつづくのだという気もした。

すると遠いざわめきのなかに、ひと声、子山羊やぎの鳴き声がまじったのを聞きとめた。久助君はしまったと思つた。生まれてからまだ二十日はつかばかりの子山羊を、昼間川上かわかみへつれていって、こん虫ちゅうを追っかけているうち、つい忘れてきてしまったのだ。しまった。それと同時に、子山羊はひとりで帰つてきたのだと確信をもつて思つた。

久助君は、山羊小屋の横へかけだしていった。川上の方を見た。

子山羊は、むこうからやつてくる。

久助君には、ほかのものはなにも目にはいらなかった。子山羊の白いかれんなすがただけが、——子山羊と自分の地点をつなぐ距離だけが見えた。

子山羊は、立ちどまつては川つぷちの草をすこし食はみ、またすこし走つては立ちどまり、無心に遊びながらやつてくる。

久助君は、むかえにいこうとは思わなかった。もうたしかにここまでくるのだ。

子山羊は、電車道もこえてきたのだ。電車にもひかれずに。あの土手どてのこわれたところも、うまくわたつたのだ。よく川に落ちもせずに。

久助君は胸があつくなり、なみだが目にあふれ、ほどほどと落ちた。

子山羊はひとりで帰ってきたのだ。

久助君の胸に、ことしになつてからはじめての、春がやってきたような気がした。

四

久助君はもう、兵太郎君が死んではいない、きつと帰ってくる、という確信をもつていたので、あまりおどろかなかつた。

教室にはいると、そこに、——いつも兵太郎君のいたところに、洋服にきかえた兵太郎君が、白くなった顔でにこにこしながらこしかけていた。

久助君は、じぶんの席へついてランドセルをおろすと、目を大きくひらいたまま、兵太郎君を見てつつ立っていた。そうするとしぜん顔がくずれて、兵太郎君といっしょにわらいだした。

兵太郎君は、かいきょう海峽のむこうの親せきの家にもらわれていったのだが、どうしてもそこがいやで、帰ってきたのだそうである。それだけ久助君はひとから聞いた。川のことでもとで、病気をしたのかしなかつたのかは、わからなかつた。だが、もうそんなことはど

うでもよかった。兵太郎君は帰ってきたのだ。

休けい時間に、兵太郎君が運動場へはだしでとび出していくのをまどから見るとき、久助君は、しみじみこの世はなつかしいと思った。そして、めったなことでは死なない人間の生命というものが、ほんとうにとうとく、美しく思われた。

そこへもうひとつ思い出すことがあった。それは、きよ年の夏、兵太郎君と川あそびにいつて、川からあがったばかりの、ぴかぴか光るおたがいのはだかんぼうを、おいしげつた夏草の上でぶつけあい、くるいあって、たがいに際限さいげんもなくわらいころげたことだった。

青空文庫情報

底本：「牛をつないだ椿の木」角川文庫、角川書店

1968（昭和43）年2月20日初版発行

1974（昭和49）年1月30日12版発行

入力：もりみつじゅんじ

校正：ゆうい

2000年1月27日公開

2006年1月28日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

川 新美南吉

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>